# 自分がおもしろいことで「まちづくり」

清 原 泰 治
(高知女子大学文化学部助教授)

北海道の釧路川をカヌーで下る。南国土佐のカヌー好きには夢のようなことだった。初めてその夢が実現したのが９年前。そして、今年９月、４回目の釧路川‘遠征’を果たしてきた。

屈斜路湖の和琴半島を出発して湖を横切り、釧路川の流れ出しにある眺湖橋をくぐって源流へ。澄んだ水が流れる小さな川には、両岸から倒木が出ており、狭い隙間を縫うようにカヌーを操る。四国の川にはない風景だ。４年前は、源流から湿原を下り、河口近くに至る‘完全漕破’を達成して、「もうこれで卒業」と思ったのだが、帰りの飛行機の中で、カヌーのパートナーと「もし叶うなら、４年後にもう一度行こう」ということになって、今年の川下りが実現した。

（眺湖橋から見た釧路川源流部）

なぜ４年に一度か。それは、もっぱら経済的な理由による。北海道までの航空機の運賃、ホテル代、食事代、カヌーのレンタル代。安売りチケットを探し、安い宿を探し、工夫に工夫を重ねても、総費用は 10 万円を超える。そう簡単には出せない金額だ。それでも、行ってみたい川である。それほどに釧路川は魅力的だ。

そういう日本人は私だけではないようで、私たちがお世話になったカヌー業者のところには、次々にリピーターが訪れているそうだ。私たちはカヌーを借りただけなので、他にどんなサービスを提供しているのか、詳しく聞いてみると…。

カヌー業者は N 社。釧路川のカヌー業者の草分け的存在である。元々は地元のカヌー愛好者のグループで、初めは、釧路川を自分のカヌーで下る人のカヌーの搬送を手伝っていた。その後、会社を立ち上げ、カナディアンカヌーに客を乗せて、カヌーを漕ぎながら川を案内するガイドをつけ釧路川下りを体験させるツアーを企画運営するようになった。

釧路川は源流部、中流部、湿原と、それぞれに表情が違う。N 社は利用者の希望によってコースを変え、ニーズにあった川下りを楽しませている。流域にはこのようなサービス

を提供するカヌー業者がたくさんあり、宿泊客に川下りをさせている民宿を入れると、その数は数十社になるという。大変な盛況ぶりだが、業者が多すぎて、淘汰が始まっている。どうやって特色を出すかが、生き残りのポイントになる。

その中でもＮ社は、特異な存在だ。一つには料金。１日コースだと、一人３万円、二人だと４万５千円になる。もう一つはサービス内容。湖岸から噴出する温泉の水蒸気で‘温泉玉子’を作って食べさせてくれる。日によっては、玉子がカニや牡蠣（カキ）になる。川下りの途中では、湧き水があるところにカヌーを止め、パーコレーターでコーヒーを入れ、手作りのお菓子が振る舞われる。昼食は地元産の食材を使った手作りのランチ。コンビニのおにぎりや弁当が出ることはない。おしゃべりが上手で、決して客を飽きさせることがなく、生活者の視点から北海道の魅力や地元の人しか知らない‘穴場’を紹介し、東京や大阪といった大都市とは異なる、地方のつらさ、苦しさを、冗談を交えながら明るく語って聞かせる。おそらくは、カヌー客たちは釧路川の自然を楽しみ、カヌーを楽しみ、食を楽しみ、会話を楽しみ、そして観光ガイドブックには書かれていない北海道を知って、十分に満足して帰るのだろう。だから、リピーターが絶えない。

(釧路川を下るカヌー。一番後ろがガイド)

このようなサービスをどうやって思いついたのか。

「自分たちがおもしろかったことだから、たぶん都会の人たちもおもしろいだろうと思って…。」

カヌーが仕事になる前、自分たちがまだ愛好者だった頃、釧路川で遊んでいたことを客といっしょにやっているのだという。なるほど、自然に存分に触れながら暮らしている地元の人たちでも楽しいことなら、都会からやってくる客はもっと楽しいはずだ。

釧路川を下りながら、あれこれ考えた。これは、高知県でも十分に活かすことのできる発想ではないだろうか。四万十川のカヌーはもちろん、海や川のスポーツ、山のスポーツ、高知県の豊かな自然を活用することはできないのだろうか。そして、地元の人が知っているとっておきの遊び方で来県者たちをもてなすことはできないだろうか。そういうスポーツや遊びを観光プランの一つに加えれば、高知県の観光事業がもっと活性化するのではないか。

例えば、田舎暮らし体験と山歩きのパッケージ。県内の中山間地域に民泊して農作業を

体験し、午後から近くの山にハイキングに出かける。山には地元の人しか知らない秘密のスポットがたくさんあり、それは都会から来た人にはたまらない魅力だ。小さな花が咲いているだけでも良いし、口に入るもの、例えば山苺の実でもなっていてそれを食べることができたら、たいへん得した気分になれる。

ところが、こういうアイデアを地元の人たちに話しても、なかなか理解してもらえない。「何でこんなことが楽しいんだ？都会にはもっと楽しいことがたくさんあるだろう？わざわざこんなことをしに来ないだろう？」と言われる。そんなことはない。高知に住んで 16 年になるが、いまでも次々におもしろいこと発見して、「高知はおもしろいことの宝庫だ！高知に住んでよかった！」と感動し続けている。この夏の一番の感動は、ライフジャケットとシュノーケリングの道具をつけて旧池川町の清流で浮遊したことだった。

「田舎はつまらない」ではなく、「田舎こそ‘おもしろいの宝庫’」と思ってもう一度わが町を見渡してみれば、きっとたくさんの宝物が見えてくるはずだ。自分がおもしろいことを人に伝え、それが広がっていけば、いろいろな意味でのまちづくりにつながっていくと思う。

私が高知女子大学で担当している「地域文化論演習」では、この秋から、全国から長期滞在型の観光客を受け入れるためのプログラム作りを始めることになった。高知のおもしろい場所、おもしろいことの情報を集め、主に退職された人々が高知を 2 週間程度の期間で訪れ、移動しながら高知を満喫することができるようにしたいとみんなではりきっている。もちろん、それがまちづくりにつながるように、あれこれと模索してみるつもりだし、総合型地域スポーツクラブにも一役買ってもらおうと考えている。